

座興に非ず

太宰治

青空文庫

おのれの行く末を思い、ぞつとして、いても立つても居られぬ
思いの宵は、その本郷のアパートから、ステッキするずるひきず
りながら上野公園まで歩いてみる。九月もなかば過ぎた頃のこと
である。私の白地の浴衣ゆかたも、すでに季節はずれの感があつて、夕
闇の中にわれながら恐しく白く目立つような気がして、いよいよ
悲しく、生きているのがいやになる。不しのばず忍はすの池を拭つて吹いて
来る風は、なまぬるく、どぶ臭く、池の蓮はすも、伸び切つたままで
腐り、むぎんの醜骸をとどめ、そろそろ通る夕涼みの人も間抜け
顔して、疲労困こんぱい憊はいの色が深くて、世界の終りを思わせた。

上野の駅まで来てしまった。無数の黒色の旅客が、この東洋一

とやらの大停車場に、うようよ、蠢しゅんどう動どうしていた。すべて廃残の身の上である。私には、そう思われて仕方がない。ここは東北農村の魔の門であると言われている。ここをくぐり、都会へ出て、めちやめちやに敗れて、再びここをくぐり、虫食われた肉体一つ持つて、檻ぼろ褌ぼろまとしてふるさとへ帰る。それにきまっている。私は待合室のベンチに腰をおろして、にやりと笑う。それだから言わないこつちや無い。東京へ来ても、だめだと、あれほど忠告したじやないか。娘も、親おやじ爺じも、青年も、全く生気を失つて、ぼんやりベンチに腰をおろして、鈍く開いた濁った眼で、一たいどこを見ているのか。宙の幻花を追っている。走馬燈のように、色々の顔が、色々の失敗の歴史絵巻が、宙に展開しているのであろう。

私は立って、待合室から逃げる。改札口のほうへ歩く。七時五分着、急行列車がいまプラットホームにはいったばかりのところ
で、黒色の蟻ありが、押し合い、へし合い、あるいはころころげ
込むように、改札口めがけて殺到する。手にトランク。バスケツ
トも、ちらほら見える。ああ、信しん玄げん袋ぶくろというものもこの世に
まだ在った。故郷を追われて来たというのか。

青年たちは、なかなかおしやれである。そうして例外なく緊張
にわくわくしている。可哀想だ。無智だ。親爺けんかと喧嘩けんかして飛び出
して来たのだろう。ばかめ。

私は、ひとりの青年に目をつけた。映画で覚えたのか煙草たばこの吸
いかたが、なかなか気取っている。外国の役者の真似にちがいな

い。小型のトランク一つさげて、改札口を出ると、屹きつと片方の眉をあげて、あたりを見廻す。いよいよ役者の真似である。洋服も、襟えりが広くおそろしく派手な格子こうしじま縞まであつて、ズボンは、あくまでも長く、首から下は、すぐズボンの観がある。白麻のハンチング、赤皮の短靴、口をきゅつと引きしめて颯さつ爽そうと歩き出した。あまりに典雅で、滑稽であつた。からかつてみたくなつた。私は、当時退屈し切つていたのである。

「おい、おい、滝谷君。」トランクの名札に滝谷と書かれて在つたから、そう呼んだ。「ちよつと。」

相手の顔も見ないで、私はぐんぐん先に歩いた。運命的に吸われるように、その青年は、私のあとへ従ついて来た。私は、ひとの

心理については多少、自信があつたのである。ひとがぼつとしているときには、ただ圧倒的に命令するに限るのである。相手は、意のままである。下手に、自然を装い、理窟りくつを言つて相手に理解させ安心させようなどと努力すれば、かえつていけない。

上野の山へのぼつた。ゆつくりゆつくり石の段々を、のぼりながら、

「少しは親爺の気持も、いたわつてやったほうが、いいと思うぜ」。

「はあ。」青年は、固くなって返辞した。

西郷さんの銅像の下には、誰もいなかった。私は立ちどまり、たもと袂から煙草を取り出した。マッチの火で、ちらと青年の顔をのぞ

くと、青年は、まるで子供のような、あどけない表情で、ぶうつと不満そうにふくれて立っているのである。ふびんに思った。からかうのも、もうこの辺でよそうと思った。

「君は、いくつ？」

「二十三です。」ふるさとの訛なまりがある。

「若いなあ。」思わず嘆息を発した。「もういいんだ。帰ってもいいんだ。」ただ、君をおどかして見たのさ、と言おうとして、むらむら、も少し、も少しからかいたいな、という浮気に似たと、きめきを覚えて、

「お金あるかい？」

もそもそして、「あります。」

「二十円、置いて行け。」私は、可笑おかしくてならない。
出したのである。

「帰っても、いいですか？」

「ほか、冗談だよ、からかってみたのさ、東京は、こんなにこわ
いところだから、早く国へ帰って親爺に安心させなさい、と私は
大笑いして言うべきところだったかも知れぬが、もともと座興ざきようで
はじめた仕事ではなかった。私は、アパートの部屋代を支払わな
ければならぬ。」

「ありがとう。君を忘れやしないよ。」

私の自殺は、ひとつきのびた。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年10月13日公開

2005年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

座興に非ず

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>